

科目名：西洋哲学倫理学史（古代）

担当者名：金子善彦

試験日：7月14日

作成者氏名：荒金彰

作成者学籍番号：12000555

注意点：それぞれが前者の何を乗り越えようとしたか、その理由を把握しておくこと。

## 1. タレス

BC6世紀前半 ミレトス学派：タレス、アナクシマンドロス、アナクシメネス

（タレスのアニミズム的発想、人間はミクロコスモス、宇宙はマクロコスモス）

XからAが生成し、Aが消滅してXに還元されるとき、一貫して存在しつづけるXをAのアルケーという。（諸事物の基本要素、元のもの）

（1）生命に不可欠な要素である栄養・熱・種子といったものがすべて湿った性質を持つ。湿り気とは水にほかならない。したがって、生物のアルケーは水である。

（2）タレスのアニミズム的世界観によれば、宇宙全体は魂で満たされており、万物は魂を持っている。魂を持つものは生物にほかならない。したがって、万物は生物である。

（1）・（2）より、**万物のアルケーは水である**とタレスは考えた。

## 2. アナクシマンドロス

仮に水・火・空気・土といった「現象する諸事物」のうち1つがアルケーであったなら、世界は今ごろ特定の要素ばかりが存在する均衡を欠いた場所になっていただろう。

しかし実際はそうっておらず、四要素のうち1つが一時優勢になっても、いずれは必ず押し返され、均衡状態が回復する。

従って「現象する諸事物」のうちいずれもアルケーではない。

アルケーは、四要素という区分を取り去った未限定のもの（ト・アペイロン）に見出さねばならない、と彼は考えた。アナクシマンドロスの理論は次のように展開される。

前提1：Xが万物のアルケーならば、世界はXに満ちている。

前提2：この世界が特定のXに満ちているということはない。

結論：**万物のアルケーはト・アペイロン（無限定なもの）である。**

ト・アペイロン：経験できないものの発見、現象の背後へ。諸事物は「交互に時の定めに従って、不正に対する罰を受け、償いをする。」

アナクシマンドロスの宇宙論

- ・4元素が均衡している。
- ・水・空気・火・土などの限定を取り払ったもの：ト・アペイロン
- ・カオス的な状態から、水・空気・火・土が別れ出る。
- ・生成とは、質的变化ではなく、相反するもの同士が永遠の動を続けながら分離することによる熱いものと冷たいものの分離である。

## 3. アナクシメネス

**万物のアルケーは空気である。**

一つの物質から生成しその物質へと消滅・解体してゆくようなアルケー

- ・希薄になると火になる。（熱くなる）密度（分量）
- ・濃くなると風・雲・水となる。土となり石となる。（冷たくなる）温度（性質）

性質を量で置き換える。

アナクシマン드로スから経験的なものへと理論的に後退し、タレス的な素材へと戻っているように見える。しかし、科学の精神の萌芽がある。（日常的な経験に裏付けられている・実証されるということに目を向けている。）アペイロンから他の事物の生成は検証不可能であるが、アナクシメネスの説は検証可能である。

#### 4. ピュタゴラス派 イタリア移住 BC6 世紀後半

**万物のアルケーは数である。** 数的比例関係を音階のうちに発見した。あらゆるものの原理として、素材ではないものに着目した。**事物を規定するのは素材・物質ではなくその形式的構造・数的関係である。**

ピュタゴラス派の哲学における「数」には、学問的な意味と宗教的（非学問的）な意味の2つがあった。（1）彼らの着想には、万物のアルケーを具体的現象である素材に求めず、素材を問わず諸々の現象のうちに普遍的に見出される数的関係という抽象的な形式に求めるという学問的意義があった。（2）しかしそこには同時に、数を神聖視する宗教性のゆえに、観測事実と理論が対立した際に理論ではなく観測事実を修正しようとする、非学問的な動きも含まれていた。

#### 5. ヘラクレイトス

ヘラクレイトスは世界のアルケーに言及しない。世界を**火のようなもの**として捉えている。ミレトス派とは異なり、単一のアルケーという考え方を受け入れていない。

火は世界の何を象徴しているか。

- （1）万物は**戦いから生じる**
- （2）万物は絶えず**流転**している（戦いによる流転）

**戦いは生存に不可欠である。**

- ・火は他のものを食い尽くして破壊することによってのみ存在しうる。
- ・戦争はすべてのものの父であり、すべてのものの王である。人間と神を分け、奴隷と自由人を分けた。戦争は遍きものであり、正道は争いであり、万事は争いと必然に従って生じる。
- ・戦いは正義である。戦いは事物の存在を可能にするためである。

##### [アナクシマン드로スへの批判]

アナクシマン드로スによれば、対立する諸元素の相互侵入を不正であり、償いをしなければならない（押し戻され本来の領分に押し戻され均衡点に帰着する）とした。

しかしヘラクレイトスによれば、戦いは正義である。全てのものは他のものを破壊することによって存在しうるからである。万物は戦いから生ずるのが正当である。

「**火は土の死を生き、空気は火の死を生き、水は空気の死を生き、土は水の死を生きる。**（互いに対立しなければ自分が存在できない生きながらえることができない）」

##### [ピュタゴラス派への批判]

ピュタゴラス派が調和を見出すところの弓矢・豎琴の調和は、「張った糸」逆向きに働き合うもの（闘い）の一体化である。表面的には平和な調和が成立しているように見えるが、その奥には激しい対立が隠されている。ピュタゴラス派の静的調和にかえて、動的調和（戦い）の重要性を主張した。

##### [万物流転]

蠟燭の炎は外見上ほぼ静止しており変わらない。しかし「本当の姿はなかなか見えない」。むしろ火の原料そのものは絶えず（対抗する力同士の戦いだけでなく）変化し、流動している。静止しているように見えていても「戦い」が大原則であり、流転はそこから派生するものにすぎない。

[同じ川に二度と入ることはできない]

「川は刻一刻と違う川になっていく」という万物流転の例。（同一化がなければ日常生活は立ち行かなくなるのであるが。）細胞の入れ替わりによって、人は刻一刻と違う人になってゆく。ヘラクレイトスは、ここにイコールの関係は成り立たないという。

同じ人と言うための基準 人物の同一性の問題（現代哲学）  
身体的連続性/記憶の連続性 記憶だけでは連続性を保証するのが難しい  
これにつながる問題の先駆者となっている（万物流転）

## 6. パルメニデス

パルメニデスによれば、今はあらぬ過去を/今はあらぬ未来を、語ることはできず、今ある現在しか語るができない。故に過去と未来を語ることを必要とする生成消滅論は否定される。「生成は消し去られ、消滅はその声が聞けない。」

真理の道（理性、探求、説得、ある）、思惑の道（感覚、彷徨い、習慣、あらぬ）：論理から導かれるのなら結論は正しい。

- 1：時間の観点・あるものは今あるのみ
- 2：生成の意味・生成はあらぬものから生ずることである
- 3・あらぬものは語ることも思考することもできない
- 4・あらぬものがあることは不可能（矛盾）

[生成消滅、変化の否定]

(A) この瞬間しか存在しない、時間の否定事実上  
あった＝あらぬ、ある＝ある、あるだろう＝あらぬ

(B) 時間は否定される。従って、時間のなかでの生成・消滅もない。

「あるものは分割できない」全体は連続的であって・分かつことができない

(C) 無（空虚）は存在しない、世界はあるもので満ちている。世界に外側はない。

(D) 「あらぬ」の介在を想定しなければ起こり得ないような「性質の変化」もありえない。

## 7. エレア学派（イタリア南部紀元前5世紀前半）

パルメニデスの流れを汲む。（パラ・ドクサ…常識はずれ、詭弁派）

エレアのゼノン：アキレウスと亀のパラドクス

・生成運動の否定、常識の全否定：これまでは「変化に満ちた世界」という認識が一般であった。例えば、ヘラクレイトスはあらゆるものは変化すると考えた。しかしエレア派はいかなるものも変化しないと考えた。（運動もない）

ミレトス派：万物は～から生成する。エレア派：自然哲学そのものを否定する。

あらぬ道を尋ねることができないのは、あらぬものは知ることも語ることもできないから。

思惟すること…あるものとあるものは断絶せず繋がっている。

あるものはどこから始めようと再びたどり着く（真理は円い）

語ること・思考すること…あるもののみがあると語り・考えねばならない

あらぬものがあるとは不可能である。

生成は打ち消され、消滅はその声が聞けない

- (1) あるものは今あるのみ 時間
  - (2) 生成はあらぬものから生じる
  - (3) あらぬものは語ることも思考することもできない
  - (4) あらぬものがあることは不可能である（矛盾の否定）
- 生成消滅を認めると、このどれかを認めてしまうことになる。

(1) 過去—現在—未来 時間の観点

現在だけがある あると言えるのは、現在だけである。

あった、あるだろう あるとは言えない

あらぬ、あらぬ

あらぬ(過去) ある(現在) あらぬ(未来)

あらぬものが、あるものに移った：これが生成の意味であろう。

あるものが、あらぬものに移った：これが消滅の意味であろう。

しかしそのようなものは語ることができない。

## 8. エレアのゼノン

経験論を排した徹底的合理主義。4つの難題

(1) 二分割のパラドクス

半分の中間地点 A に到達せねばならない

A までの中間地点 B に到達せねばならない…

いつまでも動けない

前提1：任意の A から B へ行くには、無限の行程が必要。

前提2：誰であれ、無限の行程を完遂することはできない。

結論：したがって、誰であれ到達することは不可能。

結論 B：いかなる運動は不可能である。

(2) アキレスのパラドクス：追いつけない

二分割のパラドクスは次のようなものである。

1：運動とは、任意の地点 A から任意の地点 B までの移動である。

2：地点 A から地点 B までの距離は、無限に分割しうる。

3：ところで人は無限の行程を完遂することはできない。

4：1～3より、いかなる運動も不可能である。

アキレスのパラドクスは、次のようなものである。

5：a が b を追い越すということは、a と b の間に距離があることを前提とする。

6：5 及び二分割のパラドクスで述べられた 2 と 3 より、より早い速度のものがより遅い速度のものを追い越すことはできない。

(3) 飛ぶ矢は止まっている。

どの瞬間でも空間を占めている矢は、運動しない。

・時間はいくつかの瞬間から成っている。

・いかなる瞬間でも矢は運動していない・

(4) 走路の論理

[前提1]最小の大きさを1単位とする。

[前提2]1単位距離を通過するのに必要な時間を1単位時間とする。

[結論]すれ違いによって1/2単位時間があり得る。

これは[前提1]最小の大きさと矛盾する。したがって最小の大きさというものはない。

## 9. エンペドクレス

エンペドクレスは、パルメニデスの理論の多くを踏襲する。ただし、パルメニデスはただ一つ「あるもの」のみを認める一元論を展開したのに対し、エンペドクレスは「火・水・空気・土」という4つの「あるもの」を認める多元論を展開した。

そしてこの多元論に立てば、パルメニデスでは否定された生成消滅といった現象が否定されずにすむ。すなわち**次のような説明**が試みられる。4つの「あるもの」の混合を人は生成と呼び、4つの「あるもの」への分解を人は消滅と呼ぶ。ただし水火空気土といった「あるもの」自体は、生成も消滅もしていない。我々が観察する多様な現象は、4つの「あるもの」がさまざまな仕方で混合・分離することである。

エンペドクレスは、自然世界の内部における生成と消滅の説明として、「4元素の混合と分離」を提示した。そして混合の原因となるものが「愛」であり、分離の原因となるものが「憎しみ」である。ただしエンペドクレスは、人間の感情としての愛憎そのものではなく、愛憎が人間を結合させたり分離させたりする働きに注目して、4元素の分離と結合にあたって働いているものが「愛」「憎」から類推して考えたのである。

彼によると、自然世界の歴史は、憎の完全期、愛の伸長期、愛の完全期、憎の伸長期、これらが永遠に繰り返されることによって構成される。

紀元前5世紀前半シチリア、弁論術、ピュタゴラス・パルメニデスの影響

**エレア派が覆し・疑った、現象・生成消滅運動**といった、従来前提になってきたものを**回復**した。

（ミレトス派タレス回帰に終始しない自然哲学の復権を、エレア派にどのように対応しながら行ったか。パルメニデスに対する**常識からの反論、感覚への信頼**）

**多元論的世界観**で対応する。運動生成消滅否定を導く「一元論的世界観」に対応する。パルメニデスの「真にあるものは、唯一あるもののみ」の「唯一」の部分否定。それ以外の点ではエレア派に譲歩する。エンペドクレスは、4つの根源的なものを仮定する（多元論）。

（**多元論に基づく生成・消滅の説明**とされる。）

- （1）あるものは、4つだけである。
- （2）生成：4元素の混合を人は生成と呼ぶ。
- （3）消滅：4元素への分離を人は消滅と呼ぶ。
- （4）しかし実際には生成・消滅は存在しない。水火空気土といった、「あるもの」自体は、生成も消滅もしていない。
- （5）多様な現象は、4つのあるものがさまざまな仕方で混合・分離することである。

エンペドクレスにとってのあるもの：4元論

パルメニデスにとってのあるもの：あるもの、だけ

他の部分ではパルメニデスの原則を支持する。「あらぬものからは何ものも生成しない」これはパルメニデスから継承。パルメニデスの生成否定論を維持しつつ、現象を「救う」

[生じた問題]

問題：自然世界における混合消滅の原因は何であるか。（パルメニデスの一元論では生じなかった問題）

回答：自然世界の外から働く力が混合・消滅の原因である。愛が混合の原因・憎が分離の原因である。

個物は永続しない。しかしその交替は、円環をなしつつ不動である。

[ミレトス学派との相違]

ミレトス学派：タレス、アナクシマンドロス、アナクシメネスらは、**自然世界そのもののうちに魂という原因**があり、それが生成消滅を引き起こすと考えた。事物のなかに原因がある。それ自体は生けるものである。物体自体は生きているという**アニミズム**的発想。

エンペドクレス：自然・世界の**外側に原因**があり、それが生成消滅と呼ばれるものを引き起こす。事物自体は生きておらず死んでおり、外側から原因が働いている。

生成消滅：「あるもの」の混合と分離にすぎない「あるもの」自体は生成も消滅もしない。パルメニデスの原則を尊重した議論となっている。「あらぬものからは何者も生成しない」というパルメニデスの原則を継承。パルメニデスの生成否定論を維持しつつ、現象を「救う」

「自然世界」内部での混合・分離が起こるための、それぞれの原因は？その原因は「愛」「争い憎しみ」であると考え。アニミズム的**自己発生原理ではなく、混合分離の原因が世界の外にある**と考えた。人間同士の感情的作用から類推して、愛や憎しみを考えた。

円環（周期）

1： 4つの元素が離散（分離）して、多になる。：（憎しみの完全期）

2： 愛の伸長期

3： 愛の完全期：4元素が完全に融合する。

4： 憎しみの伸長期

1：

これが永遠に続く。“エンペドクレスによれば我々は「憎しみの伸長期の終わり」にある”と思われる。我々の時代が偶々成立しているとされる。回転は永遠であるため、我々の時代は必ず到来する。（奇跡ではなく必然である）無限の時間において確率は必ず1である。

#### 10. アナクサゴラス（BC5世紀クラゾメナイ、ギリシア南部イオニア、アテナイ最盛期）

アナクサゴラスは、「あるもの」自体の生成消滅を否定する点でエレア派を踏襲しながら、エレア派では否定された多様な現象世界を復権するため、次のように論じた。

すべての個物は唯一の「あるもの」に含まれており、唯一の「あるもの」から分離することで個物が出てくる。このとき、全体から分離されて個物となるいずれの部分も、「あるもの」全体と同質である。そして、分離した諸部分内で何が優勢を占めるかに因って、諸部分の特徴が互いに異なることで、個々の現象が区別される。なお分離の原因は、世界から完全に独立した「知性」である。

自然哲学の復権、多元論的世界観、感覚への信頼、常識からの反論、エレア派との断絶

どこの部分を取っても同質である、部分と全体は同質の一なる混合体である。ただし、何が優勢を占めているかによって、個々の特徴が現れる。部分は、一なる混合体からの同質のものの分離である。個物は、分布の異なる同質混合体である。分離した個物にも、全てのものが含まれている。

無限小：「これで最小」というものは存在しないという考え方を採用する。あるものは分割できない（パルメニデス）とは異なり、あるものは無限に分割可能という、ゼノンの無限分割を踏襲した独自の多元論を展開する。

**事物の種子**：あらゆるものがそこから芽生え分離するもの。種子自体はパルメニデスのいうところの「あるもの」であり、生成消滅しない。この点でエレア派を踏襲。

エレア派への応答

- ・全ての事物の種子として「あるもの」を仮定。「あるもの」自体の生成消滅を否定。
- ・全てのものは「あるもの」からの分離である。
- ・エンペドクレスとは異なり、あるものの混合が生成ではなく、**あらゆる事物は種子（あるもの）からの分離である**と想定した。

・全てのものは相互に混じり合っている

「なぜ毛髪ならざるものから毛髪が生じ得るか、肉ならざるものから肉が生じ得るか」

「同じ種子的因子のなかに毛髪・爪などが含まれる、同じ種子的因子の中からわずかずつ分離が進む」

毛髪でないものから毛髪であるものが生じることを否定する。

Xであるものが生じるのは、元々Xであるものが含まれているから。

毛髪であるものから毛髪であるものが生じる：生成

この構図に、「あらぬもの」は一切含まれない

元々あるものに、全てが含まれているから。

**全ての個物は、「全てのもの」に含まれている。**

[エンペドクレスとアナクサゴラスの比較]

・外側からの原因は何なのかという問題が生じる。

エンペドクレスの場合、混合分離を引き起こすものは愛憎であった。

アナクサゴラスの場合、分離を引き起こすものは「知性」である。

知性は**単独で独立自存**している。**別れていなければ事物を支配することができない**であろうから。精神的なものを世界の外側にたて、世界の事象を説明する点では、エンペドクレスとアナクサゴラスは共通している。

知性の把握能力に、愛憎とは異なるものがある。知性は事物を把握し、最大の力を有する。知識が我々の行動を制御・支配するように。（個人の知性ではない）回転を支配し秩序づけ・回転運動を最初に引き起こしたのは知性である。

エンペドクレスのような混合分離だけの理解ではない。アナクサゴラスは、**自然世界における分離を引き起こすだけでなく**、宇宙の回転運動を未来永劫にわたって最初から把握していたものとして、知性を想定。**知性は愛憎よりも、自然世界からの独立性が高い。**

アニミズムでは、事物のうちに魂があり事物は生けるものであった。しかしエンペドクレスアナクサゴラスによれば、事物は死せるただのものであり、原因が外から支配するのである。この点で彼らは、すでに現代人の事物観に近いものを有していた。パルメニデス、エレア派、生成消滅の否定のパラドクスに対抗しようとしたからこそ、世界観・物質観の大転換が起こった。エレア派への対抗があったからこそ、世界観の変遷があった。（デモクリトスは、外から支配する原因という考え方すらも否定する。）

### 1.1. デモクリトス

「あるもの」自体の生成消滅を否定する点ではパルメニデスの議論を踏襲する。また、従来のエレア派と同様に、「あるもの」の集合・分散によって生成消滅を説明する。原子論者は、「あるもの」として、これ以上物理的に分割できない「原子」を想定する。また、空虚を想定する。運動とは原子が空虚の中を勝手気ままに動いていることに過ぎず、運動の原因としての魂を想定することはできない。また、魂を含めた世界に生起する全ての現象を原子で説明する唯物論を提示する。

マケドニア出身、紀元前5世紀後半～4世紀前半、古代では傍流の危険思想とされた。

原子論：生成消滅の多数性を退けず、感覚にも一致同意する理論。多元論的宇宙、自然哲学の復権（現象の多様性、生成消滅）、常識からの反論（感覚への信頼、エレア派からの断絶）

原子論：世界はブロックの組み合わせでできている。ブロック一つ一つは永遠に変わらない。ブロックを原子と呼ぶ。原子=atom (a 不 tom 分割、分割されないもの)

アナクサゴラス・ゼノン：無限小を認める、無限に分割できる。

原子論：無限に分割できない、**これ以上分割できないもの**を原子と呼ぶ。

(1) 1つ1つは硬いため分割できない。(ゼノンの場合は、幾何学的な分割可能性) **原子論の場合、概念的分割ではなく、物理的分割が不可能である。**

(2) 原子は無数に存在する

(3) 形状 AN/配列/向き、これらの組み合わせによって、アナクサよりもさらに**多様な現象**を説明できる。

[エレア派への応答]

- ・次の点でパルメニデス継承する。：原子「あるもの」自体は生成消滅しない。かつてあり、今もあり、これからもある。「あらぬもの」からの生成を否定する。

- ・ただし、それらの集合・分散によって生成消滅を説明

- ・空虚概念の導入 空虚=あらぬもの。ただし、ある/あらぬは、充実さ希薄さの程度差にすぎない(これによって運動の可能性を確保)

- ・動き回る運動が成立する余地、空虚の中を動き回る原子

[混合分離の原因、塵のたとえ]

- ・**運動の原因は存在しない**。空中のなかを塵が勝手気ままに動くように、原子も空虚のなかを勝手気ままに動く。

混合分離の原因：[エンペドクレス：世界の外部にある愛憎、アナクサゴラス：世界の外部にある知性]、レウキッポス・デモクリトス：**原因はない**

(たまたま人の形をとることがあるが、そのように見える原子のランダムな動きだけである)

これまでに比して、**それ自体は死んだような事物**の考え方が、より明瞭になる。**自然界から魂の消去、materialism 唯物論**

マテリアリズム：魂とは球場のアトムである。生命を原子で説明(魂を原子に還元)

呼吸：球状の原子が体内に出入りする。魂は原子の動きに過ぎない

視覚、全ての心の働きも原子で説明する：ものだけの世界というみかた。